

自分たちの「正義」を絶対視した朝日と高橋論壇時評

高橋論壇時評については語り尽くした感があるが、「愛国」の「作法」とやらはまだつづいているし、今後もこの調子で掲載されつづけるであろうから、もうこの調子の高橋論壇時評はうんざりであることを明らかにするために、萎える気持を奮い立たせながら、取り上げてきた義務と責任において最後まで付きあわなくてはならないと自分に言い聞かせて、さあ、総仕上げといこう。

《ジャーナリズムのことばと文学のことばは違う。けれど、共有しているものもある。だから、いまのことばを朝日新聞に贈りたい。「誤報」問題が起こったのは、自分たちの「正義」を絶対視してしまったからであるように思えるのだ。》

どこまでも卑怯だね。朝日の「慰安婦報道検証」記事が発表された時点で、すでに「誤報」問題は起こっていたのであり、いや、1999年の秦郁彦の『慰安婦と戦場の性』によって「誤報」の疑惑が提出されていた。長年月頬被りしてきた朝日がようやく「誤報」を認めただけのことであり、「誤報」を認めたから《「誤報」問題が起こった》わけではないのに、高橋論壇時評はその点をいつものように曖昧にしているのである。

前回の8.28朝日の高橋論壇時評でも、《朝日新聞が、「慰安婦強制連行」の証拠としてきた「吉田清治発言」を「虚偽だと判断し、記事を取り消す」と発表した》と書いていたが、いくら鈍感な高橋論壇時評であろうとも、遅ればせながらこの時点で《「誤報」問題が起こった》ことは明白であろうのに、そこでは朝日にむかって《「誤報」問題が起こったのは、自分たちの「正義」を絶対視してしまったからであるように思える》とはけっしていわず、秦の『慰安婦と戦場の性』に対して、《ほんとうに、そうなのだろうか。》と問題を逸らせて、小説家たちによって書かれている慰安婦へと読者を誘導していった。《自分たちの「正義」を絶対視してしまったからであるように思える》朝日にこれ以上の批判が集中しないように不要な、というよりそんなことは論壇時評の立場ではしてはならない配慮すら窺わせた。

はっきりいうと、ソントグをもちだした9.25高橋論壇時評は前回の8.28に掲載されていれば、まだマシであった。少なくとも後追い時評の印象はいくらか軽減されたはずである。もしかすると、朝日の9.11謝罪会見がなければ、9.25高橋論壇時評の内容は変わっていたかもしれないと考えられる。なぜなら、9.11謝罪会見があろうとなかろうと、8.5「慰安婦報道検証」記事の時点で《「誤報」問題が起こった》と当然みなしていたなら、それは朝日が《自分たちの「正義」を絶対視してしまったからであるように思える》といわずにはいられなかっただろうが、そういわずに、朝日に9.11謝罪会見の動きがなければ、そのまま推移することになったと考えられるからだ。要するに、謝罪会見によって朝日がいよいよ追い詰められるにつれて、高橋論壇時評ものらしくりと座視するわけにはいかなかったのであろう。時評の体裁を取り繕わざるをえなくなるほど、同様に追い詰められることになったのであろう。

《自分たちの「正義」を絶対視してしまった》のは朝日だけでなく、高橋論壇時評もそうであったのに、8.5「慰安婦報道検証」記事の時点でそういわず、9.11謝罪会見でどうにも逃れようがなくなった朝日に、自分はそうではないことを明らかに印象付けるように、《自分たちの「正義」を絶対視してしまった》朝日といまさらの如くいつてのけるのは、やはり自分を免責しようとしている点で卑怯と思わざるをえない。そういたければ、前回の高橋論壇時評で「検証の不十分さ」と「謝罪」を朝日に突きつけられなかった代わりに、せめてそういつてのけるべきであつたらう。

つづく《人は間違える（おれもしょっちゅう間違える）。組織や社会も間違える。国もまた間違える。それがすべての出発点であるように、おれは思う。それがどのような「正義」であれ、「おれは間違っていない」というやつは疑った方がいい。》という箇所も、これまでと同様に奇妙ないい分である。《おれもしょっちゅう間違える》と一般的ないい方で済ませずに、今回「誤報」した朝日だけでなく、「誤報」とは関係がなくても、「誤報」をもっと早い段階で指摘してこなかった時評子としての責任を怠ってきた点で、「おれ」も間違っていたと認める必要があるだろう。

《間違える》ことが《すべての出発点である》と思うのも、全くの勘違いである。《間違える》ことを自覚することの中に《出発点》の契機がはらまれていることは確かであるが、その自覚をどのように《すべての出発点である》ようにしていくか、そうできるかどうかは《間違える》ことをどのよう

に把握するかにかかっている。《間違える》ことを放置したり、浅く渡ろうとすれば、《すべての出発点である》ことは当然できない。言葉尻を捉えているのではない。問題を捉える発想としていっているのである。

《「おれは間違っていない」というやつは疑った方がいい》というのも、こと朝日に関しては笑ってしまう。なぜなら、朝日はこれまで「おれは間違っていない」といいつづけてきたけれども、ようやく「おれは間違っている」ということになってしまったからだ。《「おれは間違っていない」というやつは疑った方がいい》というのであれば、どうして「おれ」はこれまで「おれは間違っていない」といいつづけてきた朝日を疑ってこなかったのか。すべては口先の方便なのである。

《間違える》ことが《すべての出発点である》ということで、間違えた朝日も《すべての出発点》に立っていることを強調したいのかもしれないが、確かに間違えた朝日は《すべての出発点》に立っているだろうけれども、もっと大きな、もっと深い間違いの《出発点》にも立っていることをみなければならない。相変わらず高橋論壇時評は一方的で、公正なバランスを欠いているのである。《正しくなければ愛せないのだろうか》ということばも、正しくなくなった朝日についていっているのかと思ってしまうが、そのことばについてはもちろん、不正は愛してはならない。《ソンググにとって、祖国アメリカは、「正しさ」と「不正」の入り交じった存在だった。その、矛盾する、等身大のアメリカをこそ彼女は愛した。》というが、《ほんとうに、そうなのだろうか。》

《自称「愛国者」たち》には、《「愛」が何なのかわかっていないのだ》、と思う「おれ」には《「愛」が何なのかわかってい》るのだろうか。《ほんとうに、そうなのだろうか。》つまり、《「おれは間違っていない」というやつは疑った方がいい》ように、「おれにはわかっている」というやつも《疑った方がいい》のではないだろうか。《こんなこといってると、おれも、間違いなく「反日」と認定されちゃうな。いやになっちゃうぜ。》という結びの気取りには、反吐が出るぜ。

ごく部分的な発言しか引用されていなかったスーザン・ソンググのエルサレム賞授賞式スピーチの全文に接して、口直しをしたいと思うが、その前にエルサレム賞について、文芸誌『すばる』のコラム「ザ☆すばる望遠鏡」（09・5）で次のように説明されているのを一瞥しておきたい。

《1963年から二年に一度開催されているエルサレム国際ブックフェアの一環として設立された文学賞》で、公式HPでは、「社会における個人の自由を表現する作家に授与してきました。国際的な文学賞で最も威厳のあるもののひとつと見なされています。過去の受賞者には、バートランド・ラッセルやオクタビオ・パス、V・S・ナイポール、J・M・クッツェー（みな続けてノーベル文学賞も受賞）、さらにシモーヌ・ド・ボーヴォワールやアーサー・ミラー、スーザン・ソンググ、マリオ・ヴァルガス・リョサ、ミラン・クンデラらがいます」（編集部訳）と紹介されている。

《村上氏が受賞したのは第24回。選考委員会はエルサレム市長によって指名された三人から成り、委員長はイスラエルの有力紙「ハアレツ」の編集長。国立ヘブライ大学の教授と、テルアビブに住む人気作家が委員を務めた。》村上氏はインタビュー「僕はなぜエルサレムに行ったのか」（『文藝春秋』09・4）でイスラエルのパレスチナ政策に批判的な理由から、「最初は受賞を断わる方向に心が傾いていたが、スーザン・ソンググやアーサー・ミラーなどの受賞者が、「イスラエルに対してかなり批判的なスピーチをした」ことを知って、「もしそのように人々の前で自由に話す機会を与えてもらえるのなら、行く価値があるかもしれないと考え」たと語っており、コラムはその二人の《批判》を引用している。2001年のユダヤ系のソンググのスピーチは、次号で全文を掲載するので、アーサー・ミラーのスピーチについてコラムから切り取って紹介する。

《2003年に受賞したアーサー・ミラーは、現地には赴かず、ビデオでのスピーチを選んだ。「私の意見の原則は、ただ単純に、イスラエルは彼ら自身の国で存在する権利があり、それはパレスチナも同様であるということです。入植地が拡大するに伴って私が目撃したのは、——最初はびっくりし、後から信じられない思いにとらわれたのですが——自滅的な政策とでも言えるようなものでした」

（『The Nation.』2003年8月4日号参照、編集部訳）。1915年生まれでユダヤ系だったミラーは、続けてホロコースト以降にユダヤ人が手に入れた様々な《達成》にも言及するが、いまでは隣国ばかりか世界とも調和がとれていないことを指摘する。「ユダヤ人がその誕生以来、神は他のどの価値にも増して、とりわけ正義を体現している、と宣言したのがその理由」のひとつだと語る。「ユダヤの歴史は非常に長く、申し上げてきたとおり、正義への強迫観念で満たされています。ある意味で、今日のイスラエル国家が、ユダヤの心から生まれた非現実的な理念の横行によって攻撃されていることは、ひどい皮肉なのかもしれません。》

